

防衛大学校本科第44期、理工学研究科第37期及び総合安全保障研究科第2期学生卒業式における学校長式辞

(平成12年3月19日)

防衛大学校本科第44期、理工学研究科第37期並びに総合安全保障研究科第2期の学生諸君は、本日をもって所定の全課程を終了し、4年及び2年にわたる小原台生活に別れを告げることになりました。この間、防衛大学校における学生生活の中で、諸君が自らの青春を燃焼し、幾多の収穫と思い出を持って巣立って行かれるそのことに対して、私は、本校の教職員、指導教官一同と共に、心からお祝いを申し上げます。

本日のこの栄えある式典に、国務卿多端の折りにもかかわらず、御臨席を賜りました小渕内閣総理大臣^{注(1)}、伊藤衆議院議長^{注(2)}、瓦防衛庁長官^{注(3)}をはじめ国会議員各位、また上坂冬子氏^{注(4)}、木村学位授与機構長^{注(5)}をはじめ内外多数の来賓各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

また、卒業に至るまでの間、防衛庁自衛隊の関係者各位、官民の諸機関並びに在日米軍、各国大使館等から寄せられた御指導・御協力に対しても、併せて厚くお礼申し上げる次第であります。

更にまた、遠路をも省みず本式典に御参列賜りました御両親・御家族の皆様方に対しましては、今日までの御協力に深く感謝申し上げるとともに、立派に成長された御子女の卒業を心からお祝いするものであります。

さて、381名の本科卒業生諸君 - この中には23名の女子学生が



第6代学校長 松本 三郎

注(1) 小渕恵三

注(2) 伊藤宗一郎

注(3) 瓦 力

注(4) 作家

注(5) 木村 猛

含まれていますが－ 顧みれば平成8年の春4月、諸君は希望と緊張感に胸を震わせながら、春たけなわのここ小原台の坂を登った日のことを覚えていることでしょう。また入校後もしばらくは、慣れない学生舎生活や規律ある生活に戸惑い、将来幹部自衛官として、その生涯を防衛の職務に捧げようという決意に若干の不安を感じたことでしょう。しかし、それからの4年間、「模倣実践、切磋琢磨、自主自律、率先垂範」を各学年の合い言葉に、厳しい団体生活の中で勉学や訓練に励み、幾多の苦しい障害を乗り越え、訓練に耐え、諸君は大きく逞しく成長いたしました。かくして、幹部自衛官となるべき決意と資質は揺るぎないものとなり、今や胸を張って堂々と卒業していく諸君を、私は自信を持って送り出すことができます。

シンガポール共和国2名、タイ王国6名の留学生諸君に対しましても、心から祝福を贈るものであります。異なる文化の下で、日本の友人と寝食を共にしつつ学んだこの貴重な経験は、必ずや将来諸君が誇り得る豊かな財産となることでありましょう。諸君の母国に帰ってからの素晴らしい活躍を期待しています。

さて、卒業生諸君が入校以来しばしば耳にしてきたように、本校における教育目的の根幹をなすものは、「真の紳士淑女にして、真の武人」を育成することにあります。そのため本校では、学生諸君が「広い知識と深い専門」を身に付け、それを応用して自ら問題を発見し解決する知恵を修得することに教育の重点を置いてきました。こうした知識と知恵のある人を「教養の高い人」と呼びますが、それが正邪の区別を高い見識で判断し、間違いを犯さず正しいと考えることを実行できる人であります。幹部自衛官に必須の条件は、この意味での高い教養であり、その基盤を培うという観点から、本校では外国のどの士官学校にも負けぬ充実した大学教育が行われ、諸君はそこから多くのことを学びました。

一方本校は、生涯の天職として幹部自衛官の道を選んだ諸君に、必要とされる専門的資質の基盤を付与することに努めてきました。わが防衛大学校の庭には、本校を7度も訪れ、学生の成長に深い関心を示された吉田茂元総理の「居於治不忘乱（治において乱を忘れず）」の言葉を刻んだ石碑があります。いつ起こるか判らぬ危機に備えて、常に心をゆるめず兵を養い、力を鍛えておくのは難しいことです。しかし諸君は敢えてこの困難に挑戦し、国家、国民の危機に自らの生涯を捧げることにつき、「揺るぎない使命感」を確立し、「いかなる状態においてもそれを成し遂げる勇気と責任感」を自覚し、更に「いかなる事態にも耐え得る不

屈の心身」を練磨するため、この4年間、教育に訓練に不断の精進を重ね、立派にその期待に応えてくれました。

第1期生以来1万9千人を越える諸君の先輩達は、こうした防衛大学校における教育の成果を、一旦緩急に備えての日常の地道な勤務訓練の中で、更に国連PKO活動や様々な災害の救援活動等の中で、黙々たる内にも見事に発揮してくれております。国民に信頼される、また国際社会に信頼される自衛隊の道を一步一步着実に築いてきてくれたといえましょう。

こうした先輩達の業績を受け継いで、これから諸君の活躍する21世紀の世界は、あらゆる意味で複雑化、多様化が進み、内外の情勢は益々不透明で予測し難くなることは必至です。そこでは、いかなる任務に就くにせよ、広い視野と高い視点に立った創造的で柔軟な思考力と的確な判断力、失敗を恐れず正義のために挑戦する勇氣、そして豊かな国際感覚が求められることとなります。こうした時代の大きな節目に卒業を迎えた諸君に対し、幹部自衛官としての誇り高い任務を全うすべく、不断の研鑽と、気品に満ちた「一人間としての修業」を怠らぬよう強く望む次第であります。

次に、理工学研究科65名の卒業生諸君 - この中にはタイ王国からの留学生1名が含まれていますが- 諸君に対し一言申し述べます。諸君は、理工学に関する大学院レベルの専門的知識と技能を修得し、研究すべく2年の歳月を本校で過ごしました。この間、頭脳の充電を図り、将来への大きな飛躍の基盤を培う貴重な体験を積んだのであります。最近の科学技術の著しい進歩は、軍事面においても装備の高性能化、複雑化などの質的变化を生み、軍事戦略及び戦術に大きな変革をもたらしていることは周知の事実であります。今後諸君は、それぞれ新しい任務に就かれることとなりますが、一層の研鑽に努められ、益々重要になりつつある自衛隊の科学技術分野における発展向上に尽力されるよう、切望するものであります。

また総合安全保障研究科は本年第2期生20名の卒業を迎えました。諸君は安全保障に関わる諸問題について、総合的視野からの判断能力や政策形成の科学的分析手法を学ぶべく、この2年間研鑽に努め、貴重な体験を積み立派な成果を挙げてきました。わが国唯一の本研究科を卒業する諸君のこれからの活躍を多くの人が見守っています。先駆者としての誇りと自信を持って、それぞれの与えられた任務を着実に果たし大成されることを切に期待しています。

本年とくに喜ぶべきことは、本卒業式に、本校同窓の大先輩達多数が参列されておられることです。はじめての今年は、実に43年前に卒業された防大第1期生をお招きしましたが、全国から約150名もの方々が参加され、諸君の卒業を暖かく見守っておられます。その胸裡は、「我々の志を受け継いでしっかり頼む、あとは託したぞ」との思いで一杯でしょう。諸君、先輩達のこの熱い期待に感謝し、バトンをしっかりと受け取って下さい。

さて、諸君の小原台生活の幕は、いままさに閉じられようとしております。これから先、諸君のあとに続く後輩達の模範となるよう、いかなる部署、いかなる境涯にあっても、学生綱領の謳う「廉恥、真勇、礼節」を座右として育った防大卒業生としての誇りを持って堂々と前進して下さい。そして、陸・海・空自衛隊それぞれに進むべき道は分かれようとも、同期生同士その友情と団結を更に強め、お互い力を合わせて、祖国日本の輝かしい将来と国際社会の平和のために身を挺して行かんことを、お別れに当たり心から祈念して私の式辞といたします。

諸君、卒業おめでとう。